

外国語学習において日本人が直面する 精神的困難の諸相

Some psychological factors faced by the Japanese
in studying foreign languages

ジャン＝クロード ジュゴン (*)

(*) 静岡大学情報学部

Jean-Claude JUGON (*)

(*) Faculty of Informatics, Shizuoka University

[要旨]

この論文の課題は、外国語を学ぶ日本人が直面する心理的困難を検討することにある。そこで、2つの方向からの検討を試みる。1) 早期母子関係の研究により、日本の母親は乳幼児との非言語コミュニケーションを優先することが分かっている。日本ではすでに幼児期から、言葉は他の文化圏に見られるような重要性も権威も持っていないようだ。このことが外国語を学ぶ時に、文化に起因する新たな困難を引き起こすおそれがある。2) 日本語の語彙は西洋の言語より4.4倍も多い。言語と思考は(内面の声を通じて)非常に密接な関係を持っているので、この現象は日本人の具体的・明示的な思考機能を反映していると推測しうる。言いかえると、日本語では単語の意味論的スペクトル(連想によって意味の連鎖の上を移動する能力)がきわめて狭いし、特殊でもある。そのため、日本人にとって外国語の学習・記憶・理解がさらに難しくなる。そして最後に、日本人を対象とする語学の授業(特に直接教授法の授業)で、発話を促す方法を提案する。

[キーワード] 非言語コミュニケーション、早期母子関係、言葉と思考、明示的意味と暗示的意味、直接教授法

[Abstract]

This article attempts to examine the psychological difficulties faced by the Japanese in studying foreign languages. Two axes of research are considered. 1) The study of early mother-infant relations shows that the Japanese mother prefers to use non-verbal communication with her baby. In Japan, from babyhood, speech does not seem to have either as much importance or prestige as in other cultures. This may constitute an additional culturally related difficulty regarding the study of foreign languages. 2) Lexicon is 4.4 times more important than it is in western languages. As language and thought are indissolubly linked (for example in the inner voice), one can reasonably think that this phenomenon reflects very clearly the denotative and concrete tendency of the thought function in the Japanese psyche. In other words, the semantic spectra of words (their capacity to move along a semantic chain by associations of ideas) is more reduced and specific in Japanese. This constitutes a significant factor in a Japanese student's ability to study, memorize and understand foreign languages. Finally, the article suggests some possible directions for enhancing the speech of Japanese students in the language classroom (with emphasis on the "direct method").

[Keywords] Non-verbal communication, Early child-mother relations, Language and thought, Denotation/connotation, Direct method

序論

この論文の目的は日本人が外国語学習において、特に会話において、どんな心理的困難に直面するかを簡単に検討することである。いいかえれば、日本人が他民族に比して、言語の如何を問わず外国語による自己表現が非常に苦手なのは、どのような心の働きによるかを検討することである。はじめに、日本人が外国語学習時に直面する困難を説明するためにしばしば提出される、非心理的な理由を排除しておきたい。それらの理由は非常に数が多いので、主要なものについてだけ触れ、以後は言及しないことにする。

1. おそらくヨーロッパ人は日本人よりも、母語以外の主要ヨーロッパ言語（英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語）で容易に自己表現を行う。というのも、これらの言語はすべて、文法も語彙もきわめて共通点が多いからだ。つまり、日本人が外国語を学び始める時のハンディキャップは、ヨーロッパ人より大きいことになる。しかしこれは、日本人が英会話やフランス語会話で感じる困難のすべてを説明するものではない。中国人は日本人とほぼ同様のハンディキャップを負っているのに、私が見た限りでは、高等教育を受けた多くの中国人は英語や他の外国語を流暢に話す。少なくとも、彼らはコミュニケーションしたいという意欲を持っている。また、日本語と中国語を比べると文字はほとんど同じだし、熟語の構成と意味もほとんどの場合一致している（例えば日本語の「発展」は中国語では「发展」*fāzhǎn*）のに、日本人にとって中国語会話はそれほど簡単ではない。それどころかむしろ、あるハンディキャップを生むことにもなっている。なぜならば、日本人は会話よりも文章の読解を優先するからである。しかも中国語の発音は、日本語と共通の音素が非常に少ない上に音調アクセントがあるので、きわめて習得しにくいことも事実である。

2. 鎖国によって長いこと地の果てに引きこもっていた島国民族であり、中国人やヨーロッ

パ人のように他民族を撃退する必要もなく、ポルトガル人やオランダ人のように商業貿易の伝統も持たず、ユダヤ人のように人種差別の迫害を受けることもなかった日本人は、ついに外国語学習の伝統を持ちえなかったのである。ところが伝統こそが、外交においても商業においても、さらには単に生き延びるためにも、多言語使用が重要であることをはっきりと自覚させてくれるのだ。伝統がないのは問題意識がないからだ。そして経験が欠けていれば、問題は明確な実体を欠いた曖昧なものになってしまう。

3. 日本の外国語教育はほとんど会話に適していないと、しばしばいわれてきた。これは疑いようのない事実である。口頭コミュニケーションを阻むこの教授法の問題を蒸し返すつもりはない。このような教育が行なわれているのは、なにも日本だけではない。たとえばフランスでも外国語教育は批判され、フランス人がシェイクスピアの言語をほとんど話せないことが槍玉に挙げられている。私の観点からすれば、教授法に原因があるとする見解は、肯定的見解であれ否定的見解であれ、ひとが思うほど重要ではない。たとえある方法が、他の方法より学習者の言語能力を伸ばすことに長けているとしても、実際は、どんな方法にも長所と短所があるのだ。実は、問題は別のところにある。つまり、「鉄を打つだけでは鍛冶屋になれず、鍛冶屋としての適性が必要なのだ²⁾。別の言い方をすれば、重要なのは鍛冶屋の親方の教えだけではなく、弟子も重要な要因であって、特に、師の教えに対する先天的受容能力が問題になるのだ。

日本人の外国語学習を教授法が阻んでいることは明らかだが、私はこの理由の根底にある、表には現れにくいが同じほど重要な他の理由について述べたい。その理由は、本質的に心理的なものである。日本人に外国語を教える時、この理由を無視することはほとんど不可能である。これが原因となって、特に会話において、表現や言葉の使い方に多くの困難が生じるからである。

言葉と口唇性

精神分析学は昔から、口唇性と発話と単語の間には心理的・情動的な関係があることを示してきた。加えて、口と口蓋と歯が喉頭と声帯と気管に隣接しているため、すべての民族は比喩的表現でこの関係を説明したのである。事実、解剖学的には隣接していたり同じであったりするこれらの器官は、すべてがつながっている。したがって、それぞれの器官の特性は互いに交換可能である³。フランス語では、舌を指すにも言葉を指すにも同じ“langue”という単語を使うが、これは故のないことではない。日本語でも中国語でも、舌（舌／舌頭shétou）と発話（「話す／説shuō」、「語る／談tán」、「弁舌／口才kǒucái」）には密接な関係がある。しかし、口唇性と発話との関係が普遍的であっても、発声器官に備給されるリビドー（つまり、この器官を動かすために使われる心的エネルギーの量）は、文化によって異なることもあり、性差⁴や個人差さえある。外国語学習能力の違いを説明する際に、残念ながらあまりにも外部に原因を求めすぎるが、真の原因は、文化＝社会によって神経＝心理系に刷り込まれているのである。抽象的な直観と思考を働かせない限り、心理的理由が身体的理由と同じほど重要な、いやむしろより重要な役割を演じていることなど、現代では誰も本気で信じないだろう。

以上のことから分かるように、他の文化圏と較べて、日本の教育は発話への動機づけを軽視しているのではなかろうか。この問いに答えるのは容易ではないが、以前私は他の研究をしている時に、日本人女性の乳幼児育児に関するアンケートを行ったことがある。いくつかの項目は、早期母子関係（0～3歳の子どもと母親の関係）での言葉のやりとりに関わるものだった。つまり、調査対象の子どもはまだ話せないか、初歩的な言葉を獲得したばかりであった。ここで、そのアンケート⁵の結果を報告させていただきたい。アンケート結果の一部を見ただけでも、日本ではすでに乳児期から、他の文化圏もより言

葉が軽視されているらしいことが分かるからである。

言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション

母親の顔と視線は、子どもが自分の情動を実感しうる鏡である。ここでは、子どもの情動に対する母親の共感能力がきわめて重要な役割を果たす。乳幼児育児に関するこのアンケートでは、日本人の母親の68%が子どもとのコミュニケーションは視線で行うと言っている。母親たちは子どもの反応（44%）や態度や表情を窺い、また特に互いの微笑みを通して、コミュニケーションをはかっている。「私が話しかけると子どもが微笑む」、「私が微笑むと子どもも微笑み、恥ずかしそうな表情を見せる」。視線によって母と子は理解し合うのだ。「赤ちゃんはこのような本能的方法（視線）でコミュニケーションをとり」、「視線は子どもとの親密感を生み出し」、「小さくても赤ちゃんは私の顔が分かる」のである。70%以上の母親が、赤ちゃんがどう感じ何を望んでいるかを視線だけで理解できると打ち明けた。多くの母親は、親密であるからこそ、こうして直感的に理解できるのだと思っている。「私は感覚で理解できるが、それはこの子が私の子どもであり、私がこの子の母親だから」（19%）であって、「私がいつも子どもと一緒にいるから」（19%）である。また他の母親は、子どもの欲求をいくつかの兆候から判断している。「私は子どもの態度や表情から感じとる」、「何かして欲しい時は私を目で追ったり、泣いたりする」。つまり日本人の母親にとって、視線が特権的な非言語コミュニケーションになっているのである。

そしてまた、「赤ん坊が表現する前に身体的欲求を感じ取る」日本の母親の直感的能力は、特に発達しているようだ。この項目に68%の母親が「はい」と答え、24%が「時々」と答えているのである。母親が最も直感を働かせるのは「子どもが泣いている時」（20%）で、以下、「だっこしてほしい時」（13%）、「お腹がすいている時」

(13%)、「トイレに行きたい時」(9%)、「私と遊んでいる時」(9%)と続く。ある母親など、「ほとんどすべての身体的必要・欲求(お腹がすいた、眠い、遊びたい等)」を理解すると言っている。この非言語コミュニケーションを使うには、子どもが発する具体的なサインを確実に理解しなければならない。「泣いているけど心配ない」とか、「眠いのね」とか、「身動きしているだけ」などである。実際に77%の母親が、子どもが話せるようになるまでは「この種の直接的コミュニケーションのほうがよい」と答えている。「この種のコミュニケーションはとても大切」、「私はこうして子どもの欲求を理解する」、「私はくはい」とくいいえを体で子どもに伝える」、「子どもの欲求を満たしてやらなければ、みじめな気持ちになる」、「言葉抜きでも母親には気持ちが分かることを子どもに理解させるために、直接的コミュニケーションは重要」。つまり日本の母親は、自分の感覚を子どもの感覚とく共鳴させることを好んでいるのだ。このように日本の母親は、自分の体験を重ね合わせて子どもの身体的体験を理解する際に、内的感覚を強調する傾向がある。こうして感覚の内的経験が重要になるため、子どもは身体を「感覚的」に知覚するようになる。そして母親の気遣いと正確な言葉によって、子どもはしだいに、かなり繊細に感覚を識別できるようになるのだ。おまけに日本人の母親は必ず、子どもが体の世話をしてもらう時や入浴時に感じる喜びを強調して、「気持ちがいいね」という言葉を使う。母親が子どもの体感をとてもよく識別できるので、いわゆる「一心同体」の印象を与えることになるわけである。

このように強烈な身体的体験があれば、言葉はそれほど必要とされないのだろうか。

アンケートに回答した母親の4分の3は、「子どもに頻繁に声をかけ」ており、21%は「時々」声をかけ、4%が声をかけない。最もよく声をかけるのは、子どものそばにいる時である。つまり、「ミルクや食事を与える時」(19%)、「一緒に

に遊んでいる時」(16%)、「いつも」(12.5%)、「おしめを換える時」(9%)、または「だっこしている時」(9%)である。子どもに声をかける理由は様々で、「コミュニケーションを促すため」であり、「子どもがかわいいから」であって、「子どもが理解しなくてもいい」、「子どもより、むしろ孤独な自分のため」なのだ。言語コミュニケーションで言葉が実際に与えるインパクトと、対話者同士の共鳴現象を知るには、子どもからフィードバックされる回答が適切判断基準になる。「子どもが私に微笑みかえす」(30%)、「子どもの反応には何も変わったところはなかった」(30%)、「子どもが喜んでいる」(15%)、「子どもがじっと私を見つめる」(15%)、「子どもは小さい時から、私が言うことをすべて理解している」。

ご覧のように、日本の母親はく適度にく言葉を重視しており、しすぎることはない。それに、30%近くの母親は、言葉をかけても子どもが反応するとは限らないことを確認している。とはいえ、90%の母親が言語コミュニケーションの重要性を認めている。母親は「子どもがまだ自分の言葉を理解できなくても、自分のしていることをく頻繁にく」(54%)、あるいはく時々く(34%)言葉で説明し、「ほとんどしない」のは12%である。その理由は様々で、なかには実利的なものもある。「毎日同じ言葉を繰り返せば、子どもが少しずつ理解するようになるから」(18%)、「単語を覚えてほしいから」(14%)、「言葉をかければ子どもの脳は刺激されるし、母親と子どもの絆も深まるから」。さらには、「私が話しかければ、子どもは直感的に理解するはずだから」という回答や、「私は自分がしていることをつねに子どもに説明しているし、そうでない時は『待っててね』と言う」という回答もある。結局のところ、日本人の母親は言葉をく遊びのためくではなく、本来の目的のために使っている。つまり、自分がしていることを言葉で支え、言葉で説明してはっきりさせるのだ。適切に言葉を使っているが、言葉を仕草や視線以上に

魅力のあるものにはしていない。アンケートに答えた母親のうち、56%は子どもと「直感でコミュニケーションをしたことがくしばしばある」が、30%はく時々であり、14%はくまったくない。その状況は様々で、「遊びたがっている時」(18.5%)、「お風呂に入れている時」(18.5%)、「眠い時、お腹がすいている時」等である。この直感的コミュニケーションの特権的手段として、視線が挙げられている。子どもの振舞いを見て、直感的コミュニケーションが成立したと判断する母親もいる。ある母親は、「夫との口論の後、私が泣いていると頬ずりをしに来たので、とても驚いた」と答えた。こうした直感的交流が言葉を凌ぐこともある。「私にはほとんどすべてが分かる」、「もう覚えていないけれど、確信がある」、「私はよく直観的に、子どもが話さなくても何をして欲しいのか分かる」。

日本で母親が乳幼児の体の世話をする時、どんな言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションを行うかを問うこのアンケートから、どのような情報が得られるだろうか。

日本人の母親は、子どもが発する身体反応のサインを無意識のうちに読み取る優れた素質をそなえている。母親はこの言語下のメッセージをかなり繊細に解釈することができるため、育児で鋭い勘を発揮するのだ。彼女はこのメッセージを解読するために、自分の感覚に身をまかせ、自分の感覚を子どもの感覚と共鳴させるのである。それに、母親自身がこのやり方は簡単で早いと強調している。〈直感的?〉と形容されるこの感覚的コミュニケーションは、きわめて直接的なものであるため、言葉や論理にはあまり頼らない。そのため、日本人の母親は言葉による〈遠隔的〉交流よりも、感覚による〈近接的〉交流（接触や体内の満足感）や、非言語コミュニケーション（微笑みや視線）を評価しがちである。したがって言葉は、好んで使われるコミュニケーション手段となるほど評価されてはいないようだ。この事実が、早期の非言語的交流の豊かさと対立することを認識すべきで

ある。なぜならば、非言語的交流のせいで言葉への依存度が減少し、はるかに繊細ではあるが言葉にはできない身体的交流が促進されるからだ。他の文化、特に地中海文化や南アメリカ文化と比較すると、日本の乳児は生まれてすぐ、「話すために話す」喜びのためにのみ「音のシャワー」を浴びることはない。多くの文化圏では（アジアでさえも）乳幼児は早い時期に、言葉が人間関係においてきわめて重要であり、コミュニケーションのすばらしい道具であることに気づくのだ。そして言葉は特権的手段になり、非言語コミュニケーションは背景に退いてしまう。重要なのは相手に伝達するメッセージの内容ではなく、むしろ相手に話すことの喜び⁸である（さらには、話している自分の声を聞く喜びである）。ところでこの喜び、言葉による交流へのこの願望は、すでに乳児期から母子間の言語コミュニケーションの中で形成されるのではないだろうか。

日本文化における身体と言葉

なぜ日本人（特に日本人男性）はあまり会話が得意ではないのか、その理由をまず理解しておこう。日本人が基盤としているコミュニケーションは、言葉よりも身体を通して行われる。さらに、言葉はしばしば非難されてさえいる。いくつかの典型的な日本の概念や慣用表現が示しているように、日本人は自分たちの感覚を共鳴させて意思の疎通を図ることを好んでいる。西洋人の中には、日本をとりわけ「沈黙の文化」の国とさえ思っている人々がいるのである。

日本文化が言葉を犠牲にして培ってきた感覚的洗練さを証明する実例が、〈腹芸〉という概念である。これは純日本的なく非言語コミュニケーション技術であり、自分の意向を他人にほめかして、自分の意図に従わせるのである。そのやり方は、美辞麗句ではなく腹の力によって他人を説得するのだ。〈腹芸〉とは言葉を使わない語りであり、ビジネスで意志決定者が使う無言の腹話術である。それは、きわめて〈超然と〉

無言で部下を説得する技術である。西洋人にとってはパラドックスだが、日本人にとってはこのやり方がものを言う。上司の物言わぬ態度が、部下たちが先ほどまで気づかなかったく意味を生み出し、部下たちは冷徹な上司の「感覚的コンテクスト⁹」を瞬時に解釈して、その意味を受け入れるのである。驚いたことに、彼らは上司の意図をしっかりと理解し、そしてその意図の実現に努めるのだ。したがって日本人には、「どう思いますか」と聞くより「どう感じますか」と聞くほうがよい。日本人は一般的に、他人の体が発するサプリミナル・データ（呼吸、体臭、身振り、動作等）を無意識のうちに感じとり、自分のサプリミナル・データと共鳴させる。体の重心である〈腹〉には、体の内側や外側から来る知覚情報全体が統合されている。〈腹〉の感覚的直接性には、無謬にも等しい判断の確実性¹⁰が備わっており、ともかくも、言葉よりも優れた判断の確実性を備えてはいるが、言葉で表せないという短所があることも事実である。

文化的見地からすれば、日本人は非言語コミュニケーションに、より多くの関心を抱いている。慣用表現からもわかるように、日本人は「一心同体」になって他人と同調するために、「言挙げせず」に「以心伝心」で理解しあい、「寡言沈黙」で「肝胆相照らす」仲になることを好むのである。これらはすべて、日本語のいくつかの表現¹¹が示唆するように、論争や論証の理性を寄せつけぬ、「身体¹²の形而上学」とでも呼べるような日本独特の感覚を基盤としている。

言葉を犠牲にした身体感覚の優位性は、わずかな機会を捉えて〈自分の内部に戻っていく〉日本人の優れた能力にも現れている。周囲の状況が整うやいなや、日本人は臆面もなくまどろみ始める。授業中の学生、会議中の社員、シンポジウム中の大学人がそうである。わずかな時間すら盗むようにして居眠りをするのは、仕事による過労のせいもあろうが、やはり、痺れたような身体的幸福感へとたやすく戻っていくことを示している。人間は単調な状況から逃れられ

なければ、不満を解消するために頭か体を使って逃避する。その場合、西洋人は頭を使ってすぐに物想いに耽るが、日本人は体に頼って苦もなく感覚の世界に退避してしまう。

言葉と思考

この論文で言葉と思考の関係を詳述することはできない。そこで、日本人の外国語学習者が直面する困難を示す、一般的な指摘だけにとどめておこう。日本人の心の中では、言葉を犠牲にして身体感覚と非言語コミュニケーションが重視されると、すでに私は述べた。それは、言葉がコミュニケーションの手段としてなおざりにされているという意味ではない。とはいえ、日本では他の文化圏ほど言葉が重要性や影響力や〈権威〉を持たないようである。ところが発達心理学では、言葉と思考が発達の過程で密接に結びついていることが知られている。事実、話すにも考えるにも語彙が必要であり、発音・語形・統辞の規則等を身につけていなければならない。そして、言語と思考を結びつけるのが〈内面の声〉である。頭の中で聞こえるこの小さな心の声が、私たちがものを考えており、おそらくは熟慮しているということの証拠なのである。この声は、その時に機能している主体の現れである¹²。単語と思考がつながっていることは、基礎を習得しない限り外国語で考えることができないという事実によって明らかである。したがって、母語以外の言語で考えることができるようになれば、その言語をほぼ身につけたことになる。あとは、習得したことを定着しさえすればよい。原則的に思考活動は、母語の完全な習得と同様、成人してから完全な習熟度に達するのである¹³。

日本人が外国語を学習する場合、一定のレベルに達したら作文（文章の構成、仮説の設定、レポートの作成等）でも会話（意見の表明、アイデアの発信、問題の討議等）でも、同じように自己表現ができなくてはならない。つまり、母語ではない言語を使って考えをまとめられな

ればならないのだ。ところが、どれほど多くの日本人がこの種の訓練で苦勞しているか、外国教師は皆知っている。ほとんどの場合、学習レベルの低さ故の困難ではなく、概念を操って抽象的に考える習慣のない日本人学習者特有の困難なのである。概念は思考の道具のようなものだ。何か仕事をする時に、道具なしで行なうことは考えられない。鍛冶屋には金槌と鉄床があるし、作家には紙と万年筆が必要だ。一方、抽象的思考を十分に展開するには、批判的分析力、厳密な推論、論理的展開といった特質が必要であり、それらによって論証が明晰になるのである。日本の教育は思考主体（これは唯一の主体ではなく、感覚＝感情の主体もある）の発達を促そうとはせず、それどころか妨げてさえいるため¹⁴、日本人は母語で思考を表明するにもかなりの苦勞をしている。したがって、会話であれ作文であれ、外国語で自己表現するよう求められた日本人が、乗り越えがたい困難に直面するのは容易に理解できる。

さらに、ヨーロッパ言語を学習する日本人にとって、まったく予想外の障害が存在する。言葉と思考の関係がとても密接であることはすでに述べたが、当然のことながら、思考の働きが言語を構成するのであって、その逆ではない。言い換えれば、言語（その音素、形態素、構文、語彙）というものは、その言葉を話す民族の思考

の働き方を反映している。重要なのは思考の内容（理念や概念等）ではなく、思考そのものの働き方なのだ。ところが明らかに、日本人の思考の働き方はヨーロッパ人とは異なる。そしてそのことが、言語の習得と記憶に影響を与えるのだ。残念ながらこの問題は、外国語を自由に操る通訳・翻訳者や、それと同じレベルの日本人にしか理解されていないのである。それではこの問題は、どのように現れるのだろうか。

すべては第二次世界大戦後、モスクワで始まった。モスクワ国立言語研究所が、英語・フランス語・スペイン語を比較して、単語の使用頻度とその順位を調べる研究を行なったのだ。特定の語は使用頻度が高く、その他の語はほとんど使われていないことが明らかとなった。例えばフランス語では、頻度順位1,000位までの基本単語が、一冊の本で使われる単語のおよそ80%を占めている。5,000位まで取れば96%に達するのだ。したがって、この5,000語を知っているフランス人は、母語でやすやすと話し、読み、書くことができることになる。例によって、日本にもこの研究に興味を持った言語学者がいて、モスクワ国立言語研究所と同じ調査を行なった。ところが驚いたことに、フランス語と同じ96%に達するには、日本語ではおよそ22,000語が必要なのだ。フランス語の4.4倍である。以下が、2つの調査の結果である¹⁵。

ヨーロッパ言語と日本語の単語頻度分布

モスクワ国立言語研究所の調査				日本の調査	
単語群(頻度順)	英語	フランス語	スペイン語	日本語	
最初の千語	80.5%	83.5%	81.0%	560語	50%
2番目の千語	6.1	5.9	5.6	2,800	73%
3番目の千語	3.4	3.4	2.9	7,200	85%
4番目の千語	2.2	1.9	1.8	9,700	89%
5番目の千語	1.3	1.3	1.2	15,400	93%
合計：5,000語	93.5%	96%	92.5%	22,000	96%

この調査から何が分かるのか。日本の言語学者がこのテーマを真面目に考察したとは思えな

い。彼らのほとんどが、語彙の多さは日本語の生命力と豊かさの証しだと満足げに言っている

ただだ。そうかもしれないが、心理学者や心理言語学者の見解はこれとは違う。なぜならば、ヨーロッパ人は明らかに5,000語でもって、22,000語を使う日本人とまったく同じことを言っているからだ。前述したように、言葉と思考は切っても切れない関係にある。言葉には物・観念・存在の表象が結びついているため、言葉がなければものを考えることができない。したがって、ヨーロッパ言語と比較した日本語の語彙のインフレ状態は、日本人の思考法がヨーロッパ人とは違うことを示している¹⁶。もう一度繰り返すが、重要なのは思考の内容ではなく、思考の働き方なのである。

日本人の心の中の思考機能は抽象には鈍感であって、ある現象全体や全存在に適用できる一般概念・普遍的命題・総合的概念に対する感度が鈍い。つまり、日本人の思考機能は具体性やプラグマチズムや選言的特殊命題へと向かい、物一般に適用される概念を使わずに、そのつど異なる物・要素・状態に適用される特殊（土着）概念の使用へと向かうのである¹⁷。日本人の思考法は、さまざまな現象を同一のカテゴリーに集めてそこから（共通点に基づく）普遍的法則を引き出すかわりに、（相違点に基づく）個物の特殊性を強調して、個物をかけがえのない唯一物にしてしまう。とはいえ、日本的思考法に概念的・普遍的アプローチが欠けているわけではなく、実体を最小単位にまで細分化する反対の傾向に較べて、あまり目立たないし使われてもいないというだけである。日本に長く住む外国人は、国籍にかかわらず、皆一様に苛立ちながら同じことを言う。日本人は具体的なことに關しては、取るに足らない細部についてく異常に細かいく理屈をこねるが、重要に見えても抽象的なことに關してはとても曖昧であると。この指摘は、日本人と西洋人の思考機能の違いをはっきりと裏づけている。そして思考と言葉の間に密接な関係がある以上、日本語の語彙とヨーロッパ言語の語彙にも同じ相違が見られるのは当然である。日本語の語彙のインフレ状態

は、日本人が好む「分離派的・一義的」思考と密接な関係がある。したがって単語のく意味論的スペクトル¹⁸、つまり、単語が連想によって意味の鎖の上を移動する距離は、一般的に、日本語ではヨーロッパ言語より短いのである。日本人の思考は対象を最小単位にまで分割する傾向があるので、膨大な語彙を必要とすることになる。もしそのために、日本的思考の具体的・一義的な表現が4倍以上も正確になり、豊かになるとしても、抽象的・多義的に包括する能力は4分の1になり、貧しくなるのである。たとえ日本的思考が一方で何かを得たとしても、他方では何かを失うことになるのだ（ユングの精神補償メカニズムによる¹⁸）。

こうして、日本人の外国語学習者にとっては恐ろしい結果が出現する。ひとつの単語が、そのつど違う日本語に対応するいくつもの意味を持つこのジャングルの中で、どうすれば道に迷わずにすむのか。日本人が外国語学習に際して直面するこのような困難を、とりわけ語彙が急増する2年目からの困難をさらに明確にするには、より正確な補足的研究¹⁹が必要になるだろう。一義的傾向を持つ日本語と、多義的傾向を持つヨーロッパ言語の相違を理解してもらうために、例をあげてみよう。フランス語の *sens* という単語には非常に広い意味がある。1) 感覚、2) 方向、3) 意味/意義である。フランス語の文章では前後の文脈によって、これらの意味のどれがふさわしいかを判断できるが、日本語では各単語の一義的意味が曖昧さを排除してしまう。これとは逆に、日本語を学習する外国人は、日本語の膨大な語彙を記憶するのに大きな困難を覚え、個々の文脈にふさわしい単語（ほとんど唯一の単語）を見つけだすのに苦労するのである。

外国語学習において、日本人が直面するであろういくつかの心理的困難を検討してきたが、ここで2つの主要な軸が明らかになった。第1の軸は、そのモデルとなった早期母子関係を見れば分かるように、非言語コミュニケーション

が日本文化においては優位を占めているという事実である。日本人同士のコミュニケーションでは、身体と感覚的知覚がきわめて重要である。これは日本人の特徴であって、外国人教師は一般にこの特徴を意識せず、そのため生徒がわけもなく緊張していると感じることが多い。第2の軸は、日本語とヨーロッパ言語との比較調査が示しているように、日本人の思考の働き方が西洋人とは異なることである。とはいえ、妥当であっても証明されていないこの仮説を裏づけるには、他の調査が必要であり、性急に結論を出すことはできない。

日本人の外国語学習の障害となる心理的要因は他にもあるだろうが、その問題は別の機会に譲ることにする。最後に、外国語学習の困難を日本人に克服させようと努力している外国人教師を支援するため、いくつかの提案を試みよう²⁰。

教室で会話を促すには

ここまで、心理学（見えない力と無意識的動機の科学）からの前置きが長くなったことをお許しいただきたい。この分野の知識がない方は退屈な思いをされたことと思う。とはいえ、この論文の内容からすれば、心理学的知識なくして、日本人に外国語学習で感じる心理的困難を乗り越えさせ、外国人教師にこの困難を認識させて教授法を改善させ、よりコミュニケーションに適したものにさせることができるだろうか。ここでは、教授法に関していくつか指摘するにとどめるが、その具体的内容は今後発展させる必要がある。

1) 何よりもまず再確認しなければならないのは、知識伝達の基盤となるのは、教師と生徒の間に成立する信頼関係だということである。信頼関係があれば、生徒は動機と学習意欲を失わないからだ。生徒はこの関係を通して、外国語で自己表現する喜びを徐々に知っていく。外国語を話すことにどんな喜びを見出すべきかわからない日本人学習者にとって、このことは特にあ

てはまる。学習の初期段階から、モリエールやゲーテの言葉で楽しむことができるのだ。外国人教師の役割は、学んでいる言語の初歩しか知らない生徒に対しても、このコミュニケーションへの意欲をかき立てることである。

2) どのような教育戦略を立てれば、生徒に口を開かせることができるのか。1年目の生徒に対しても、学習言語の初歩的知識を利用して〈直接教授法〉を使うことができる。授業中に教師は文法の説明をほとんど、あるいはまったくせずに、状況を設定して直ちに会話に移る。本当の狙いは、1回目の授業からすぐ、外国語で話す楽しさを生徒に経験させてやることにある。こうして初めのうち、生徒は日本語と比べる必要から解放され、疑問の奈落へと墜落せずにすむのである。生徒は教師に全幅の信頼を寄せ、教師は生徒に、面倒な説明抜きで話せるようにしてみせると約束する。たとえ限られた時間であっても、教師は会話に適した状況、外国語で話す楽しみに適した状況を、教室の中に作り出さなければならない。私がほぼ実践している〈直接教授法〉は、例文中に図式や単語選択肢を示して、簡単な会話用の構文を与えるものである。この構文から出発して、生徒を中心に会話を進めるのが望ましい。つまり、生徒に自分のことを話させるのだ。したがってこれは、文法・講読・作文を基礎とする伝統的授業ではない。反対に、直接教授法は生徒を学習の核心に据え、会話を授業の中心にしている。教材も、教師と学生の直接的コミュニケーションを中心にしたものである。したがって、教師は毎回の授業で会話能力の評価を行なうことになり、習熟度を確認することもできる。その一方、教師は毎週生徒たちと話すのだから、特に定員数の多いクラスでも生徒を知ることができる。こうして教師は個々の生徒のレベルに合わせ、各自が抱えている問題に的確に対応できるようになる。

3) あまり生徒数が多くないクラス（およそ20人）では、寸劇を暗記させて、授業中に演じさせることもできる。外国人教師は暗記の価値をほと

んど認めないが、それは暗記を〈高貴な〉活動とは思っていないからだ。事実、暗記に必要なのは繰り返しの能力だけであり、生徒は「オウム」のレベルにまでおとしめられる。しかし、私はよい面があると思っている。なにしろ、日本人の学生はカリキュラムの中で、非常に多くの情報を記憶することに慣れているのだ。いずれにせよ、外国語学習に不可欠なこの能力を使わない手はない。他方、役を演じるには感情をかき立てなければならず、生徒が過去の体験を思い出すため、記憶が活発に働くようになる。つまり、感情を伴った記憶になるのだ。もちろん、暗記はそれ自体が目的ではなく、外国語で話す〈喜び〉を具体化する手段にすぎない。このようにして日本人の学生は、自国以外の文化では言葉と話術が高く評価され、また人の評価を高めることをすぐに理解する。外国人教師が、自国の文化では（日本と比べて）言葉がきわめて重要であることを手短かに説明するのは、重要であると思われる。内気な生徒をあえて話さなければならない状況に置くことで、この文化的事実を経験させ、気後れを克服させてやるのだ。能や歌舞伎の長い伝統が示しているように、日本人が通念に反して演劇や演出にとっても敏感であることに私は気づいた。一度信頼関係が築かれ、気後れがなくなれば、日本人の学生はとても協力的で、積極的に寸劇に参加する。他方で、台詞を暗記して劇を演じれば、動作、身ぶり、態度、言葉の相互連携がかなりスムーズになる。別の言い方をすれば、語学の習得には身体も情動も共に必要であって、この種のコミュニケーションに敏感な日本人学生にとって、これは有利な条件といえる。教師はこうして、自国の文化特有の身ぶりを示して、その意味を学生に説明することもできる²⁴。

4) 日本の学生に、自分とは違う考え方が外国語ではどのようになされるかを理解させるために、できる限り彼らに言葉の起源を説明すべきである。その語の語源は何か、意味はどのように変化してきたか、などである。この方法の教育効

果以外の利点は、たとえば西洋人がどのような考え方をするかを、具体的に（つまり理論抜きで）説明できることである。列挙や体系的説明を避け、異文化比較の視点を導入して、生徒に学習中の言語に興味を持たせることができるのだ。ところで、外国語学習で問題が起こるのは、この異文化理解という次元なのである。ここで例を挙げて、あるフランス語の基本単語が意味の連鎖に沿ってどのように連想を展開してきたか、そして、それがどのように西洋精神特有の共示的思考を反映しているかを、説明しよう。

Train という語を例にとろう。ヨーロッパ言語において、この語の類概念としての意味は、「誰かの後に続く駄獣の列」である。例えば、羊飼いの後ろを小走りに駆けながら鳴いている羊の群れだ。このイメージから出発して意味がずれていき、「後ろから見た、歩いている動物の群れ」に似たものを意味するようになった。つまり「ひと連りの客車」、すなわち *train* になったのだ。その後、この「動いている群れ」のイメージが意味を別の方向へと向け、より抽象的なメタファーを生みだし、意味の範囲が拡大されて「連続」（一連の措置 *un train de mesures*）、「移動の様態」（この調子で行くと *le train des choses*、先頭を走る *mener le train*、同じことの繰り返し *le train-train*）、「精神状態」（～している最中 *être en train de*、元気はつらつ *avoir de l'entrain*）を表すようになり、さらには「体の目立つ部分」（お尻、*le train*、四つ足動物の後半身、*l'arrière-train*）を指すようになった。このような意味の移動を説明することによって、西洋の思考は明示的でなく共示的に働きやすいため、ひとつの単語が様々な意味を持つことを、具体的に理解させることができる。

このように、〈厳密に言えば〉、日本語には *train* とまったく同じ語は存在しない。日本語には *train* はひとつだけでなく、少なくとも3つあるのだ。1. 汽車（蒸気機関車 *le train à vapeur*）2. 電車（電気機関車 *le train électrique*）3. 列車（多くの車両からなる列車 *le train formé de*

nombreuses rames) である。そして、どのタイプの train のことを話しているのか示すため、文脈に応じてこの3つの語のどれかを選ばなければならない。つまり、この3つの語は互いに交換不可能である。フランス語のように、ごく一般的に “le train arrive”、つまり「train が到着する」とは言えないのである。そのつど、状況に応じてどの train を意味しているのか明示しなければならないのだ。したがって実際には、抽象的な類概念としての train は存在せず、種類の異なる具体的な train がいくつか存在するだけである²²。これが、明示的・一義的思考と共示的・多義的思考を分けるものだ。日本語は文脈に依存しているため、意味の転換や隠喩的移动がさらに困難になる。というのも、特定の状況に従って考えられコード化された単語は、別の状況には適用し難いからである。このように日本語では概念化が行われず、それに反して文脈化がかなり強いいため、具体的事象において極めて正確な(細かい)言語になったのだ。日本語は味わい深い細部に富み、時には目を奪う思いがけない細部もあれば、新鮮でユーモア溢れる細部にも事欠かない。そのため、日本語は魅力的な言語になったのである。

結語

ひとりの人間、グループ、または民族の精神的活動を阻害したり促進したりする心理的要因を明らかにすることは、それほど簡単ではない。説明をつけるためにしばしば外的要因を探し、すべてはまず人間の心の中で始まるということを忘れてしまう。したがって、この論文のテーマである外国語学習に関する問題のように、心的活動に関する問題を取り扱うには、人間の心的装置とその機能に関する知識が欠かせない。私としては、この論文で示そうとしたように、心理学を用いれば、問題の所在を明らかにし、より深く詳しい優れた分析を行い、長期的には適切な答えをもたらしようと確信している。これが私の結論であり、理解されることを期待する。

参考文献

- Abdallah-Preteceille, Porcher, Béacco, Knox, Pugibet:
La civilisation. Collection Didactique des langues étrangères, Clé International, 1986.
- Azra & al.:『外国語教授法としての “Méthode Immédiate”』, Université d'Osaka, 2002.
- Besnard, Ch.: Les contributions de la psychologie cognitive à l'enseignement stratégique des langues secondes au niveau universitaire, in *Revue canadienne des langues vivantes*, vol 51, n 3, pp 426-441, 1996.
- Camilleri, C.: *Anthropologie culturelle et éducation*, Delachaux et Niestle, Lausanne, Unesco, 1985.
- Disson A.: *Pour une approche communicative dans l'enseignement du français au Japon, bilan et propositions*, Osaka University Press, 1996.
- Hall E. T.: *La dimension cachée*, Seuil, 1971.
- Hall E. T.: *Au-delà de la culture*, Seuil, 1976.
- Hinds J.: Contrastive rhetoric: Japanese and English, *Text*, 3, 2, pp 183-195, 1983.
- Jugon J.-Cl.: *Phobies sociales au Japon, timidité et angoisse de l'autre* (日本における対人恐怖症—他人への内気と不安), ESF Editeur, 2000.
- Jugon J.-Cl.: *Petite Enfance et Maternité au Japon, perspectives transculturelles* (日本における早期母子関係), L'Harmattan, 2002.
- Jugon J.-Cl.: Pour une meilleure compréhension de l'âme japonaise (日本人の心をよりよく理解するために), *Revue Daruma* (à paraître, 近刊).
- Kaplan R. B.: Cultural thought patterns in intercultural education, *Language Learning*, 16, pp 1-20, 1997.
- Matsumoto M.: *The unspoken way. Haragei: silence in Japanese business and society*, Kodansha, 1988.
- Mauviel, M.: Le multiculturalisme, in *Revue française de pédagogie*, N 61, 1982.

Oxford R.: *Language learning strategies: what every teacher should know*, Newbury House Publishers, 1990.

Takagi Y.: Différences d'organisation textuelle en français et en japonais, *Bulletin of the Osaka Prefecture University, Humanities and Social Sciences*, 48, Université préfectorale d'Osaka, pp 89-102, 2000.

Watzlawick, Beavin, Jackson: *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies and Paradoxes*, Norton, 1967.

Zarate, G.: Objectiver le rapport culture maternelle/culture étrangère, in *Le français dans le monde*, N 181, 1983.

岩淵悦太郎：『現代日本語』、筑摩書房、1970。

[注]

2. 「習うより慣れろ」という意味のフランス語の諺 “C'est en forgeant qu'on devient forgeron. (人は鉄を打つうちに鍛冶屋になる。)” の言いかえ。この諺によると、鍛冶屋になるには経験を積めば十分なはずだが、本当だろうか。初めに「鍛冶屋の魂」が必要ではなからうか。
3. 例：歯に衣を着せぬ / 直言不讳 zhíyánbúhuì (ne pas mâcher ses mots)、舌が回る / 口齿流利 kǒuchǐ liúlì (iavoir la langue bien pendue)、など。
4. 少なからぬ例外があるとはいえ、女性が男性よりも〈おしゃべり〉なことに誰も異議を唱えることはできない(9歳の女子は男子に比べて、言語の面で18ヵ月早熟である)。その原因は、女性が男性よりも左脳をよく使うことにあり、また、女性が口数の少ない男性より心理的には内向的なこと(つまり、対象や外側の世界ではなく、主体や内側の世界に関心が向くこと)にある。したがって、一般的に男性より女性の方が、外国語学習では意欲的であり積極的である。

5. J.-Cl. Jugon: *Petite Enfance et Maternité au Japon, perspectives transculturelles*, L'Harmattan, 2002. 言葉のやり取りに関するアンケートの内容は以下の通りである。1) あなたは自分の子どもによく話しかけますか。どのような状況ですか。なぜですか。子どものどのような反応に注目しますか。2) たとえ子どもが理解しないとわかっていても、あなたが子どもとしていることを言葉にして説明しますか。なぜ説明するのですか。3) 反対に、視線や仕草で話しかけることを好みますか。好む場合、その理由は？ またそれは、視線と仕草のどちらですか。4) 子どもと直感的コミュニケーションを経験したことがありますか。ある場合、どのような状況ですか。5) 子どもが身体的欲求を示す前に、それを感じ取ったことがありますか。どのような欲求ですか。どのような状況ですか。6) あなたは、この種の直接的コミュニケーションのほうを好みますか。好む場合、その理由は？
6. 「気持ちがいい」とか、その反対を意味する「気持ちが悪い」という表現は頻繁に使われる。一般的に日本人は自分の身体感覚を日常生活でよく口にする。
7. この非言語コミュニケーションは身体を基礎としているので、「感覚的」と言う方がよいだろう。
8. このように言葉に執着するからこそ、弁護士・役者・政治家という、言葉の巧みな扱いを必要とする職業に就けるのだ。
9. 彼らの感覚に基づいて理解する。このコミュニケーションは日本人同士でしか通用しないということは、明言するまでもない。
10. つまり、日本人の本音を知るためには、腹(たて前の反対)を探らなければならない。戦いの時、昔の侍は、敵が腹を据えているか、心づもりができていないかを知るためにこの方法を用いていた。
11. 例えば「体で覚える」、「体験する」、または

「体得する」。

12. ヨーロッパでは昔、祈りや祈祷や詩編を声を出して唱えていた。おそらくは、神に届かせるために。実際には、内面の声をもたらす主体性が、まだ精神の中にしっかりと根づいてはいなかったからである。沈黙の祈りを捧げるようになったのは中世からだ。今でも、神への感謝の祈りを声に出して唱える文化（イスラム文化、仏教文化）が多く存在している。つまり、思考活動を通して主体性を告げる心の声が、それ自体としては必ずしも認められていないのだ。
13. 思考を可能にする神経解剖学的条件を除けば、心の中に思考を出現させる主な心理的理由は、感情のフラストレーションである。人間は欲求不満になればなるほど、その埋め合わせとしてものを考えざるをえなくなる（ただし、それは熟慮ではない）。
14. 日本では過度な批判精神は歓迎されない。そんな精神を持てば人の反感を買い、さらには「理屈っぽい」人扱いされることになる。
15. 岩淵悦太郎、『現代日本語』、筑摩書房、1970年。2つの調査に使われた方法はおそらく異なっており、調査結果の比較の信憑性を弱めている。とはいえ、日本語とヨーロッパ言語の間に認められた語彙の差は、調査法の違いだけで説明できるものではない。
16. 日本語の語彙のインフレ状態については、漢字の影響を調査すべきであろう。中国と日本だけが漢字を使っているのだから、中国語との比較研究は欠かせない。
17. 和語には「水」と「お湯」という2つの異なる単語がある。「熱い水」、「冷たいお湯」という表現はまったく不可能である。漢語では「冷水」はある種の重複表現である。なぜならば、「水」という語にはすでに「冷たい」という意味が含まれているからだ。水がある一定の温度に達すると「お湯」になるが、その「お湯」の同義語として「熱湯（沸騰した水）」があり、さらには「温水（な

まぬるい水）」という奇妙な表現もある。温度のぬるさ故に「湯」ではなく「水」という漢字を使い、穏やかな温度を思わせる「温」をこれに組み合わせたのだ。和語はこのような水のさまざまな様態を示しているのだから、日本人は水を一般的自然元素（化学における H_2O ）として理解するより、その個別の様態を別々に表示することを好んだのだ。この明示的傾向は初めから存在したと思われるが、非常に記号論的な思考方法が存在し、丹念なコード化（少なくとも具体的な物質については）が必要であったことを示している。また、このコード化は他の多くの分野にも現れている。

18. 情報学部で行った授業、「情報病理学」を参照。
19. 留学生、特に中国人との比較研究は非常に興味深いものになろう。
20. いずれにせよ、日本人の学生は大学入学時まで、口頭表現において何年間も消極的であったことを忘れてはならない。
21. 事実、身ぶりはしばしば言葉を必要としない。体が話し、時には言葉の意味を補うことさえある。私は特に否定疑問のことを考えているのだが、否定疑問においては、フランス語で *Si*（はい）と答える場合に日本語では *Non*（いいえ）と答える。ところで、「はい」か「いいえ」を意味する頭の動きだけで答えることがとても多い。例えば、「あなたは日本人ではありませんか」という質問に対して、日本人の生徒が首を左右に振って「いいえ」（私は日本人です）と答えたら、相手の西洋人はその生徒を韓国人か中国人だと結論するだろう。
22. このように、日本人の母親が坊や達に *train* の通過に注意を向けさせようとして使う「汽車ぼっぼ」という子ども向けの表現は、厳密に言えば、汽車を表す文脈中では使われることはないのである。この記述においては汽車を「電車」または「列車」で置き

換えることは不可能なのである。